

所 陵

No. 70

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



伊万里錦手大皿（江戸時代）

● 目 次 ●

ロンドンの博物館を巡って (1) ～ケンジントン地区～	池田 勝彦	2
菅楯彦「金剛暮雲」とその時代	米田 文孝	6
奈良盆地のノガミ行事	黒田 一充	10
芝居町を展示する	櫻木 潤	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

ロンドンの博物館を巡って(1) ～ケンジントン地区～

池 田 勝 彦

ロンドンの博物館の雄はもちろん「大英博物館」(British museum)である。大英帝国時代の「戦利品」で埋めつくされた様は壮観である。ただ、「戦利品」は多くの「インディー・ジョーンズ」によってもたされた事実を認識する必要があるかもしれない。

British museum については既に安武真隆先生によって詳細なご報告(肝陵 No.69)があるので、そちらをお読みいただければと思う。

1995年に在外研究でロンドンを訪れてから2015年で20年になるが、その間すくなくとも年に1度はロンドンに足を運んでいる。決して「ロンドン通」などと豪語できるほどの情報も無いが、20年間に亘ってロンドンの定点観察をしてきたことは確かである。そこでロンドンについて書かせていただいても、叱られないのではと思ひ、ロンドンの博物館を取り上げさせていただくことにした。

最初にお断りしておかなければならないことがある。ロンドンについては少しだが情報を持っているが、UK 内でロンドン以外の街は全く知らないと言ってよい。スコットランド、ウェールズ、北アイルランドは訪問したことが無い。イングランドでも、ロンドン以外では主要な都市や観光地のみで、昨年夏に国際会議の関連でリバプールを初めて訪問したような状況である。元工業都市であるマンチェスターにはいまだに行く機会がない。つまり、ロンドン偏重型の知識しかないといわれても仕方がない。この点はまずお許しいただければと思っている。

今回は、私の在外研究先であったインペリアル・カレッジ(IC)のあるケンジントン周辺の博物館について紹介したい。

ケンジントン周辺の主な博物館は、ビクトリア・アルバート博物館(Victoria-Albert Museum, V&A)、科学博物館(Science Museum)、自然史博物館(Natural History Museum)になると思う。もちろん探せばまだまだあるかと思うが、情報が無いのでお許しい

ただきたい。

ロンドンの中で「大英博物館」につぐ博物館は「V&A」だと思う。ビクトリア女王とその旦那様のアルバート公の名前を冠した由緒正しい博物館である。科学・芸術をこよなく愛したアルバート公が大英帝国の産業の発展を願い、王室の狩場であった場所で開催した1851年のロンドン万国博覧会の後、1852年に産業博物館として開館したのがV&Aの前身である。

この博物館の売りは「芸術とデザイン」とされている。陶磁器、家具、衣装類、ガラス細工、宝石、金属細工、写真、彫刻、織物、絵画などがぎゅうぎゅう詰めに陳列されている。まさに「陳列」という表現が正しく、何らかの意図を反映させて「展示」されているという感じではない。この陳列感が「大英博物館」と大きく異なる点である。

大英博物館は「学芸員」がしっかりと収蔵品を調査し、それに基づいて整然と展示されている。それも「見る側」を強く意識した展示になっていると思う。博物館であるから当然であるといえは当然であるが、「V & A」は違う。品物が多いからそれを見えるように如何に並べるかが重要であるように思える。この品物が「なぜここに」という印象を受けることがある。V & Aの学芸員の「深い」洞察のもとに置かれているかもしれないが、私のような「ずぶの



写真(図)1 ビクトリア・アルバート博物館の正面玄関付近



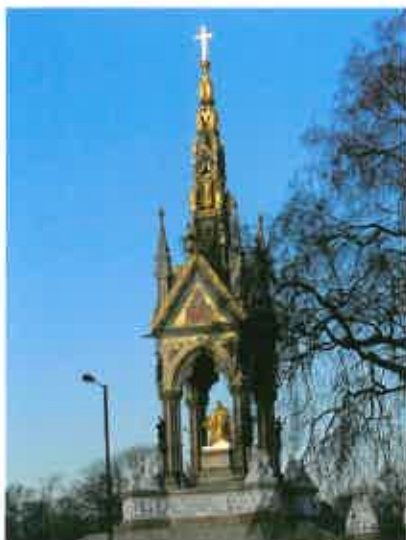
写真(図) 2 ロイヤルアルバートホールの正面玄関付近

素人」にはそれを推し測ることができない。

写真1はV & Aの外観である。如何にもという建物であり、ビクトリア女王の威光が感じられる。

アルバート公の名前が冠されている建物では、ロイヤル・アルバートホールがある(写真2)。円形の建物で、夏恒例のThe Proms(クラシック音楽コンサート)が行われる会場としても有名である。エアコン設備が長らく設置されず、夏は暑い会場として有名であった。現在はエアコンの設置もあり、夏が暑いということも回避されていると思う。さらに、アルバート公の冠する建造物としては、ケンジントン・ガーデンに立つアルバート・メモリアル(写真3)がある。金色に輝くアルバート公の像が鎮座している。観光案内になってきたので話を戻すことにする。

「芸術とデザイン」を展示することを宣言し



写真(図) 3 アルバートメモリアルの正面



写真(図) 4 ファッション関連の展示

ている博物館であり、「ファッション」が重要なアイテムの一つである。ファッションを時代ごとに展示している。写真4に示したような展示となっている。ファッションの進歩を常設で展示している博物館も珍しいであろう。

アルバート公が科学・技術を好んだことを反映して、「Materials & Technology」の展示も充実している。「材料と技術」を展示するためにアイテムに、宝飾品・銀製品・陶磁器などを挙げている。確かに材料と技術である。この範



写真(図) 5 銀食器関連の展示 (1)



写真(図) 6 銀食器関連の展示 (2)

疇で括ると、彫像も絵画もすべて「材料と技術」である。写真5・6がそれにあたる。この展示が私には「陳列」に見えてしまう。「芸術とデザイン」と「材料と技術」を融合させて博物館として唯一のものかもしれない。この点ではとてもユニークな博物館かもしれない。入場は無料だが、マップは1ポンドの寄付、博物館維持の4ポンド以上の寄付をお願いしたボックスが玄関にそれとなく設置されている。なぜかボックスは透明である。

次も「材料と技術」の総本山的な博物館である科学博物館（Science Museum）に話を移す。この科学博物館にはイギリスが「産業革命」の国であることを示す多くの展示がある。たとえば、ロバート・スチーブンスンのロケット号が展示されている。これは蒸気機関車第1号である。科学技術の進歩に影のように付きまとう「兵器」についても展示されている。写真7はV2号の模型である。ロンドンを恐怖に陥れた代物



写真(図) 7 V2号ミサイル



写真(図) 8 原爆投下後の広島からもたらされた資料



写真(図) 9 原爆関連資料の説明文（一部）

である。これには「最初の実験」と書かれてあった。確かに「最初の実験」に違いない。この説明は非常に重い意味が封じ込まれているように思える。

写真8は原爆投下後の広島からもたらされた資料である。写真9がそれらに関する説明（一部）である。その説明文に「・・・which helped end the Second World War.」と書かれている。この一文が欧米人の考え方の根底にあるかもしれないということは意識すべきであり、これを変更しないということも強く意識すべきであると思う。しかし、この記載が永遠であるとは思えないし、思いたくない。

ところで、私はバイオマテリアルの研究者の端くれでもあるので、バイオマテリアル関係の展示について少し触れることにしたい。その例を写真10に示す。この展示物は人工関節等がブ



写真(図) 10 バイオマテリアル使用部位を示すための展示



写真(図)11 自然史博物館概観

ラスチック人体に埋め込まれている。バイオマテリアルで製造された生体用の部材・器具がどのような位置にどのように使用されているかがとてもわかりやすく展示されている。われわれも心掛けたい「見せ方」の好例であると感じた。

科学博物館は、科学・技術のすばらしさと恐ろしさを見せつける博物館である。さらに、科学・技術はニュートラルで、それを扱う「人間」によって素晴らしくも恐ろしくもなることも（潜在的であるかもしれないが）見せつけている博物館でもある。

最後に自然史博物館（Natural History Museum）である（写真11）。正直まだ入ったことのない博物館なので期待していたが、恐竜の展示と入場無料が影響してか、とんでもない人人で（写真12）、ウインブルドンで約5時間並んだ猛者の著者でも勇気ある撤退をした。この博物館については次の機会に書かせていただければと思う。

今年もロンドンで年末・年始（2014年12月28日～2015年1月3日）を過ごした。例年になく



写真(図)12 自然史博物館への入場を待つ人人人…

晴天の日が続いた。これほど晴天が続いたのは1995年以降でも経験しなかったことである。ただ、晴天であると放射冷却のために冷え込むことが多いという難点もある。また、ロンドンの冬名物であるゲール（強風）にも遭遇することなく過ごせた。これも非常にまれなことだと思っている。

1995年以降、20年間にわたりロンドンという「博物館都市」を見てきたが、このロンドンでさえも近代化（良い意味でも悪い意味でも）してきており、定点観測者として非常に興味深く感じている。

「ロンドン観光案内その1」とした方がよいような内容で「博物館誌」の原稿として相応しいかどうか非常に疑問である。著者の能力不足であることでお許しいただければと思っている。

もし次に機会を頂戴できるのであれば「ロンドンの博物館を巡って（2）～自然史博物館～」または「ロンドンの博物館を巡って（2）～コベントガーデン周辺～」を書かせていただければと思っている。

菅楯彦「金剛暮雲」とその時代

米 田 文 孝

1. はじめに

近代の大阪画壇を代表する日本画家のひとりで、没後50年展の開催をはじめ、近年再評価されつつある菅楯彦は多作で知られる。しかし、太平洋戦争で焼失したり所在不明であったりする作品も多く、その作品を全体的に把握・集成することは難しい。これには、祖父（蟠龍）・父（盛南）・叔父（泰民）・妻（美記子）たちの伝記・遺稿集『三茎一艸』が楯彦の厳密な校正や用紙不足もあり、1941年末に頓挫したことなど、同時代的な年譜類がないこともその確認を困難にしている要因であろう。

楯彦の作品は、作風の変遷から大きくその制作年代を類推できるが、本紙や共箱に干支を記した作品や、展示会図録・目録などの同時代資料で照合できる作品を除き、その断定は困難である。とくに、太平洋戦争前後における楯彦の画業は、史資料の制限も影響して把握が難しい。このような状況下、1942（昭和17）年11月27日（金）～29日（日）の3日間、大阪高島屋美術部で菅楯彦の小作品展が開催され、そこに出品・販売された作品（「金剛暮雲」）を1点確認できたので紹介する。

なお、楯彦の作品には、「萬歳」「中元踏歌」をはじめ、同名同工の作品が散見されることか



写真2 「金剛暮雲」の姓名印と関防印（原寸）

ら、その特定は必ずしも容易ではないが、今回紹介する「金剛暮雲」は作品の特徴や関連史料の比較などから、この小作品展に出品されたものであると推断できる。

2. 「金剛暮雲」について

まず、「金剛暮雲」をみておくと、横幅の本紙は紙本淡彩で51.8cm（縦）×60.5cm（横）、軸先は象牙様模造品である（写真1）。本紙上には、姓名印の朱文方印「菅楯彦印」（没五十年展図録印譜集姓名印 No.31、1937年以降）と、関防印の白文方印「從善如流」（同図録印譜集関防印 No.17、1939年以降）・白文方印「大哉業矣」（同図録印譜集関防印 No.18、1932年以降）の落款がある（写真2）。姓名印と関防印の使用開始年代は、本作品の制作時期を1942年と措定することに矛盾を生じない。

楯彦は作品にしばしば詩や歌などの画讃を加えるが、本作品にも本紙の右側に、「南朝枯木鎖寒霏 五百春性（原漢詩では六百春秋）一夢非幾度問天天不答 金剛山下暮雲歸 録 溪琴翁詩」と記され、菊池海莊（溪琴）〔1799～1881年〕の漢詩「河内路上」を記している。また、左側には「余徘徊金剛山下 近五十年焉 今為加西之客 追想以雖作此圖 至志不至筆如何 浪速御民楯彦」と、独自の書風でこの作品に込めた思いを吐露しており、詩画一致の境地を示している（写真3）。



写真1 「金剛暮雲」



つぎに、共箱(桐製)の外側には「金剛暮雲」、内側には「浪速御民楯彦」の墨書と白文方印の氏名印「楯彦」(没五十年展図録印譜集姓名印No.51、1923年以降)の落款があり、二重箱(桐製外箱)の蓋には「高島屋美術部」と印字された題簽に、「金剛慕情・個展作品」と外題が記されている。これらの共箱や外箱、楯彦の特徴的な書体による墨書作品名(箱書)などから、一体の拵えであることに違和感はない。

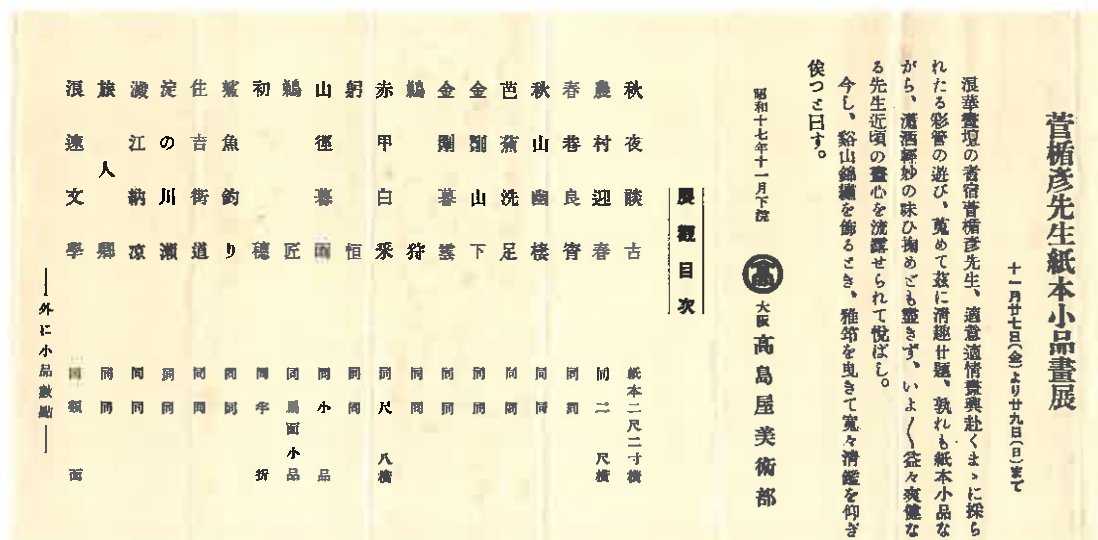
また、これとは別に大阪高島屋美術部で開催された菅橋彦の小品画展の目録がある（写真4）。この目録は、和紙一枚物の印刷物（38.5cm×19.0cm）で、20数点の作品名が記載されている。小品画展の開催にかかる挨拶文に続き、「秋夜談古」と題する紙本2尺2寸（約67cm）横の作品1点の次に「農村迎春」以下、紙本2尺（約60cm）横の作品名が7点続き、「金剛暮雲」はその6番目に掲載されている。その他、扇面小品1点、額面1点、半折（縦約136cm×幅約35cm）6点、小品数点が記載されるが、ここにある「金剛慕情」が本作品に該当する可能性がある。

さらに、「金剛慕情」の共箱内に添えられた本作品の白黒写真(縦10.8×横12.8cm)と、その裏面の墨書(昭和十七年十一月菅楯彦先生個人展観)・捺印(高島屋美術部)を勘案した場合、本作品がこの目録の「金剛暮雲」と一致するものと判断してよいであろう(写真5)。

3. 菅楯彦1942年の画業

上記の結果に加え、菅楯彦の1942年11月の年譜(画聖菅楯彦名作大成、没五十年展図録ほか)を参照すると、11月10日(火)～15日(日)の6日間、大阪大丸で小品画展が開催されたことは知られているが、これに続いて11月27日(金)～29日(日)の3日間、大阪高島屋美術部で菅楯彦の小品画展が開催されたことを追加できる。上述した展覧目録に「浪華画壇の耆宿」とあるように、この「金剛慕情」を制作したとき、菅楯彦は65才に達していた。

また、1942年の年譜によれば11月の展示会に



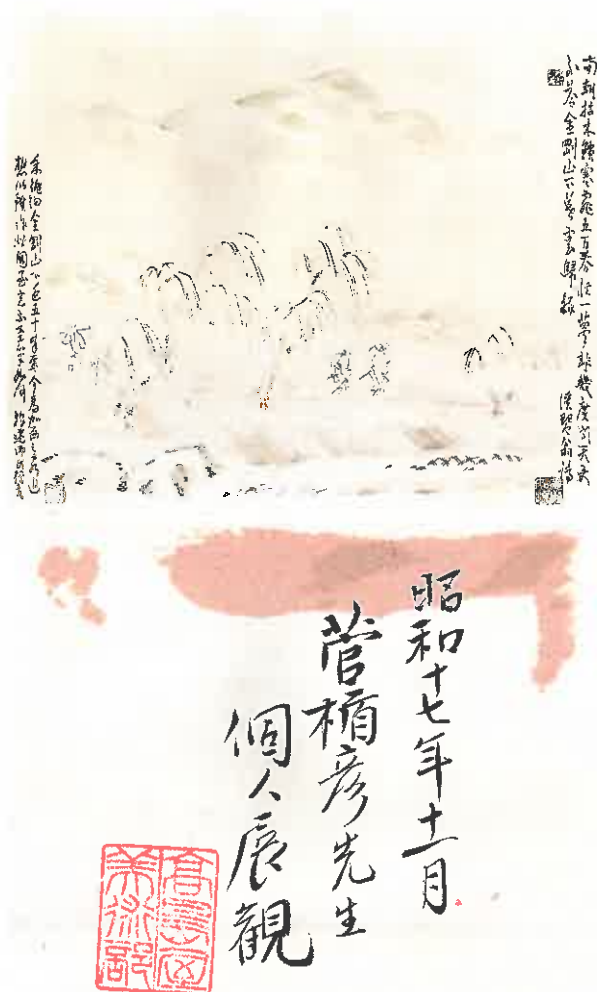


写真5 同封写真(上)とその裏面(下)

先立ち、2月3日(火)～8日(日)に大阪松坂屋で開催された「大阪日本画報国会献納日本画展」と席上揮毫、3月19日(木)～22日(日)に東京三越、同4月22日～28日まで大阪三越で開催された日本画家報国会主催による「日本画家報国会主催 軍用機献納作品展覧会」に参加している。

この時に作成された図録によると、菅楯彦は「社人迎春(迎)春」(作品番号182)を出品している(写真6)。現在、本作品は東京国立近代美術館の所蔵であるが、この経緯は会場を提供した三越が全作品184点を購入し、東京帝室博物館に寄贈したことによる。

ところで、「社人迎春」と「金剛慕情」を比較したとき、その彩色の変化に気づく。「社人迎春」では群青・緑青をはじめ、楯彦が好んだ高価な顔料を用いた鮮やかな着色が施されているが、「金剛慕情」では淡く彩色されるのみである。これが画讃にある楯彦の心情を反映した

本作のみの特徴である可能性について検討しておく、「金剛慕情」と同時に出品されたと推定できる作品に、小品画展目録の5番目に記載された「芭蕉洗足」がある。この作品は落款の共通性や画讃の内容から、楯彦の没後10年、顕彰建碑記念として編纂された図録にある「蕉翁洗足」(菅楯彦名作大成 No.73)と同一作品と推定できる。同図録には白黒写真で掲載されているが、同様の傾向が看取できる。

結果的に、淡彩は「金剛慕情」にのみ特有な描画法ではないと推定できるが、この変化は何に起因するのであろうか。

4. 太平洋戦争下の日本画壇

1942年、「大阪日本画報国会献納日本画展」と「日本画家報国会主催軍用機献納作品展覧会」が開催された2月～3月前後、陸軍はシンガポール・ニューギニア侵攻、海軍はジャワ沖・スラバヤ沖海戦などの第一段階作戦とそれに継起する一連の作戦を発動していた。しかし、大阪高島屋美術部で小品画展が開催された同年11月までには、4月18日のドーリットル隊による東京・名古屋・神戸などの初空襲を契機とした6月のミッドウェー海戦とその後のソロモン沖海戦、南太平洋海戦、あるいはガダルカナル島での攻防戦などが続き、陸海軍とも敗色を深めつつあった。また、同盟国のドイツ第6軍も水陸交通の要衝スターリングラード(現ボルゴグラード)の攻防戦において、ソ連軍の反攻(ウラヌス作戦)により包囲され、第二次世界大戦も大きく戦局の転換期を迎えた。

逼迫した戦局下、画用絹購入に切符制が適用される事態に端を発して1942年3月、日本画製



写真6 軍用機献納作品展覧会図録

作資材統制協会（会長野田九浦）が発足した。これには先立つ1940年7月、商工・農林両省から「奢侈品等製造販売制限規則」（通称七・七禁令）が公布・施行され、工芸作家は蒔絵に金を使用できないなど大きな影響を受けていた。施行当時は適用除外されていた日本画家も、開戦により緑青・群青をはじめとした輸入顔料、さらに木材統制により木枠などの入手が一段と困難になったことが背景にある。藤田嗣治をはじめとした戦争画にみる茶系統の色調も、絵具の欠乏が影響していたのであろう。

このような状況について、太平洋戦争当時を回顧した高島屋美術部の社内座談記録にも、同部を次第に覆う暗雲について、悲壮感が漂っている。1942年には売場面積も縮小され、生産制限や配給制度の導入から、各種資材の入手が困難になり、新作品の制作が不如意になったことや、若年社員の出征も重なり、一時は閉鎖寸前まで追い込まれたことが綴られている。

時を同じくする1942年3月、文展無鑑査や院展・青龍社同人190名から構成される日本画家報国会（会長野田九浦）が設立され、前述した軍用機献納作品展をはじめ、献金・献納運動を展開した。例えば、前述したように軍用機献納作品展覧会の出品作品は一括して三越が買い上げ、売上金20万円は陸海軍恤兵部（献金・寄付による軍需品の購入や戦地慰問団の派遣など兵士に対する福利厚生）へ、10万円ずつ献金された。

なお、日本画家による献納運動としては、先に横山大観が皇紀二千六百（昭和15）年と、自らの画業50年を記念し、「彩管報国」（絵筆を執って国に尽くすこと）を意図した個展がある。大観は陸海軍を意識した「海・山十題」の連作20点を展覧し、その売上金50万円（2万5千円×20点）で陸海軍に各2機計4機の軍用機（陸軍愛国445〔大観〕号・446〔大観〕号、海軍報国383〔大観〕・384〔大観〕号）を献納した。

1940（昭和15）年5月に献納された愛国445〔大観〕号機は97式重爆撃機と推定され、納入価格は1機約25万円であった。第二次世界大戦の開戦前夜、軍需成金の出現による美術品の高騰、特に日本画壇の活況と一部の著名作家とはいえ、作品価格の実情を物語る一例であろう。

その後、1943年5月には発起人280余名を集めて、社団法人日本美術報国会（会長横山大観）

の創立総会が開催され、第一部として日本画（部）会長野田九浦、幹事長山口蓬春、理事安田靱彦、通称美報）がおかれた。また、日本画資材統制協会や美術家連盟、全日本彫刻家連盟、工芸美術作家協会を統合し、社団法人日本美術及工芸統制協会（会長吉野信次、理事長小玉希望、通称美統）も設立された。

美報・美統の本部は共に東京三越内に置かれたが、画材は従前の配給方法から、美統に配給を認められた作家でなければ事実上、入手できない状況を生み出し、美統に所属する一部著名作家による独占化が進んだ。両者は表裏一体の組織として、戦時下美術の総合的統制と振興に貢献することになった。

5. おわりに

以上のように、「金剛慕情」の存在が確認されたことにより、1942（昭和17）年11月27日（金）～29日（日）の3日間、大阪高島屋美術部で菅楯彦の小品画展が開催されたことを、新たにその年譜に追加することができた。あわせて、出品作品のひとつである「金剛慕情」にみる画風の変化から、顔料や画材の供給量や質的転換にみる、戦時下の美術界をめぐる厳しくも、特異な時代相の一端を垣間見ることができた。楯彦（美術界）も1942年の流行語のひとつ、「欲しがりません勝つまでは」の状況に呻吟しつつ、画業に勤しむ姿を髣髴させる。

【主要引用・参考文献】

- 倉吉博物館1997、『浪速の雅人 菅楯彦』倉吉博物館
迫内祐司2004、「戦時下における美術制作資材統制団体について」『近代画説』第13号、明治美術学会
菅楯彦顕彰会1973、『画聖 菅楯彦名作大成』そのⅡ図録編、菅楯彦顕彰会
高島屋美術部五十年史編纂委員会1960、『高島屋美術部五十年史』、高島屋本社
鳥取県立博物館2014、『没後五十年 菅楯彦展 浪速の粹 雅人のこころ』、鳥取県立博物館
日本美術院百年史編集委員会1998、『日本美術院百年史』7巻、日本美術院
野田九浦編1942、『日本画家報国会主催 軍用機献納作品展覧会図録』芸艸社
東京文化財研究所「美術界年史（彙報）」
<http://www.tobunken.go.jp/materials/nenshi>
鳥居行博「藤田嗣治と戦争画」
<http://www.geocities.jp/torikai007/war/bunkajin-picture.html>
陸軍愛国号献納機調査報告
<http://www.ne.jp/asahi/aikokuki-top.html>

奈良盆地のノガミ行事

黒 田 一 充

滋賀県湖東地域から京都府南部、奈良県にかけての地域では、ノガミ（野神）とよぶ聖地をまつる信仰がある。その多くは、樹木がある塚や杜である。

滋賀県日野町中山では、9月1日に野神山の頂上にある祭場に、集落内の東谷と西谷地区の若者たちが、それぞれの地区で栽培した里芋を孟宗竹に括って持ち寄り、その茎の長さを競う芋くらべ祭りがおこなわれる（写真1）。長さを測るだけだとすぐに終わりそうだが、2時間以上をかけてさまざまな儀礼がおこなわれる。



写真1 中山の芋くらべ祭り（2003年撮影）

このほかにも、滋賀県では7月下旬から9月上旬にノガミの行事があるのに対し、京都府や奈良県は5月か6月の中旬が多く、端午の節句にあわせて男の子たちが主体となっておこなわれている。

奈良県では、奈良盆地とその周辺部に見られ、ヨノミ（榎）の木をまつる所が多い。古い地図などには「野神」や「農神」の字が当てられており、ノガミサンあるいはノーガミサンと敬称を付けてよび、ここでの行事の名称にも使われる。

写真2は大和郡山市^{しぎ}椎木町の西椎木のノガミサンで、ヨノミの木に祠がまつられており、周囲には水田が広がっている。この場所は、西隣の安堵町との境に位置している。



写真2 椎木町のノガミサン（2014年撮影）

天理市平等坊町では、近鉄天理線の南側に広がる田畑の一面にノガミサンがあり、5月5日に^{ジャ}藁蛇を納める（写真3）。ここにはかつてヨノミかムクノキが立っていた塚だったが、樹木がなくなって土が崩れ出したため、周囲をブロックで囲んで現在の形になっているという。

ノガミの行事では、藁蛇を作ってヨノミの木に巻きつけ、ミニチュアの農具を納めることから、農耕儀礼と考えられているが、村境に藁蛇をまつる信仰は、年の初めに綱や縄を村の入口の道路や川の上に渡して張る勧請縄の行事と共通している。奈良県教育委員会の文化財調査報告書『大和の野神行事』（1986年）には、行事が残っていないものも含めて52か所の報告が



写真3 平等坊町のノガミサン（2008年撮影）



写真4 蛇穴のノグチサン (1987年撮影)

されているが、その中には勧請縄と区別しにくいものも含まれている。

御所市蛇穴の行事はノグチサンとよばれ、5月5日の朝から野口神社の境内で藁蛇（蛇網）を作る。前日に頭だけを作って当屋の床の間でまつておき、当日は胴の部分を延ばして約15メートルの長さにする（写真4）。蛇が完成すると、子どもたちが中心となって集落内の各家へ引きまわしていく。夕方になって神社に戻ると、昔は境内の榎の木に蛇を巻きつけたが、現在は境内の蛇塚とよばれる場所に、とぐろを巻かせて納める（写真5）。

田原本町鍵の行事は蛇巻きとよばれ、6月第1日曜の午前中に八坂神社の境内で藁蛇を作り、午後から子どもたちが中心に担いで廻る。蛇の頭は藁5束で作り、胴体の太さは約30センチメートル、長さは約15メートルになる。



写真5 野口神社境内の蛇塚 (2005年撮影)



写真6 鍵の蛇巻き (2014年撮影)

藁蛇の頭の重さは約200キログラムにもなるため、中学生、高校生に大人たちも加わって担ぎ、尾は年少の子どもたちが担ぐ（写真6）。蛇の前方には、2人の中学生が土産箱を先端に括り付けた青竹を担いで進み、結婚や出産など、この1年間にお祝い事のあった家に寄り、その玄関に土産箱を突っ込んでお祝い事を述べ、お祝儀をもらう。この土産箱には、鍬や鋤・鎌など榎の木で作ったミニチュアの農具を入れる。集落内を廻って西端のハッタハンとよばれる場所に着くと、蛇の頭を地面に下ろし、尾をヨノミの木に巻きつける（写真7）。

鍵の行事が終わるころ、北西隣の今里の集落でも藁蛇が完成し、ワカメの味噌煮が参拝客に配られる。その後、杵築神社を出発して藁蛇を担いで廻る。こちらの蛇の頭は、鍵ほど大きくないため、お祝いをする家には蛇の頭を突っ込んでいる（写真8）。今里のノガミは、北東の村はずれに近い場所にあったヨノミの木だったが、枯れてしまったため、戦後は神社の境内にあるヨノミの木に巻きつけ、根元の小祠にミニ



写真7 鍵のハッタハン (2002年撮影)



写真8 今里の蛇巻き (2002年撮影)



写真9 ヨノミの木の小祠をまつる (2002年撮影)

チュアの農具と牛馬を描いた絵馬を奉納する(写真9)。

蛇や龍は水神であり、とくに蛇は古くから三輪山の神の正体だとされてきたことから、農業に適した雨が降るように祈るのと、村境で外部からの悪いものの侵入を防ぐことから、このような祭りの形になったのであろう。

藁蛇を担ぐのではなく、駕籠に乗せて運ぶ所もある。川西町下永では西^{にしんじょう}城と東^{ひがしんじょう}城の地区で6月第1日曜日にキョウとよばれる行事がある。キョウは、行事のあとで地区の人たちが食事会をすることから、ごちそうを意味する「饗」が行事名になったとされている。

ここでは麦藁の蛇をジャジャ馬とよんでおり、西城では竹に巻いて集落の北側、初瀬川の対岸にあるノーガミサンへ運び、そのまま頭を上にしてヨノミの木に立て掛ける(写真10)。それに対して、東城ではジャジャ馬を駕籠に乗せ、集落東側のノーガミサンへ運ぶ(写真11)。駕籠は竹製で、センダンの小枝で覆って子どもたちが担ぐ。藁蛇を駕籠に乗せる事例は、奈良盆地ではここだけである。



写真10 下永・西城 ノーガミサンに奉納されたジャジャ馬 (2014年撮影)



写真11 下永・東城 藁蛇に乗せた駕籠 (2006年撮影)



写真12 下永・東城 粽をまく (2006年撮影)



写真13 上品寺町のシャカシャカ祭り
(2005年撮影)

ノーガミサンでの神事が終わると、はったい粉（麦こがし）をマコモの葉に包んだ粽^{ちまき}が撒かれ（写真12）、拾った人は自分の家の軒に吊して蛇除けにするという。蛇をまつる祭りで、蛇除けは奇妙に感じられるかもしれないが、端午の節句に粽を吊してマムシ除けや虫除けにする民俗である。

このような藁蛇を担いで廻る行事は、檀原市上品寺町のシャカシャカ祭り（写真13）などでも見られるが、三宅町石見では稲藁に杉葉を挿して蛇に見立てるなど（写真14）、藁蛇の頭部が省略される所もある。

天理市新泉町では、集落の外れに位置する素盞鳴^{すさな}神社の境内で5月3日におこなわれる。ここでは、麦藁で牛・馬・ジャジャ馬（ムカデとも）を、竹で小さな唐鋤・馬鍬・梯子を作り、祠の前に設けた小さな砂場で農具や牛馬を使って農作業の所作をおこなう（写真15）。最後に



写真14 石見のジャ（2008年撮影）



写真15 新泉町のノガミ行事（2014年撮影）

馬を走らせて3周した後、祠の周りに藁の作り物やミニチュアの農具を納める。年の初めのおんだ祭りでよくおこなわれる農作業の模擬儀礼で、収穫を願う予祝の儀礼である。境内には小さな土俵も設けてあり、かつては子どもたちの相撲があったようである。

こうして記すと、どの地区でも行事が盛んにおこなわれているように見えるが、実際には子どもの数が少なくなって省略されるようになった行事も多い。

檀原市地黄町では、参加した男児たちが墨を付け合うスミツケ（スツケ）祭り（写真16）が中止になり、ノーガミへ藁蛇を納める行事だけになっている。鍵の蛇巻きも、参加する中高生の数が減り、2002年には1時間ちょっとで村中を廻ってハッタハンに到着していたが、昨年（2014年）は休憩を入れながら倍の時間がかかっていた。人口の減少は、子どもの行事の伝承に大きな影を落としている。



写真16 地黄町のスミツケ祭り（2002年撮影）

芝居町を展示する

櫻 木 潤

今年、道頓堀は開削400年という記念の年を迎える。芝居町として産声をあげたこの町は、人形浄瑠璃や歌舞伎の観劇客でにぎわう江戸・明治を経て、大正12年(1923)の松竹座開場の頃には、カフェや西洋楽器店などが立ち並ぶ「モダンな町」へと変化し、現在では、「食い倒れの町」大阪を代表し、海外までに知られる名所となっている。

大阪都市遺産研究センターでは、校友から寄贈された一枚の絵をきっかけに、道頓堀の景観変遷を「形と心」の両面から辿ろうとする試みとして「芝居町道頓堀の景観復元プロジェクト」を進めてきた。その第一弾の成果がCG「道頓堀五座の風景」であり、地元の道頓堀商店会やHPで公開するや大きな反響を得た(藪田貫「芝居町道頓堀をCGで描く」、『アステイオン』80、2014年)。CGは、明治末期から大正初年の道頓堀の町並みを再現し、いわば「形」としての道頓堀をヴィジュアル化したものであり、公開当初から芝居小屋の内部や「町の情緒」といった「心」の再現を求める声が寄せられた。

幸い、明治から大正にかけて道頓堀の劇場を手がけた大工棟梁であり大道具師でもあった中村儀右衛門の資料や、松竹の美術宣伝部長として松竹座で上演される映画や歌劇のポスター・舞台意匠などを手がけた山田伸吉の資料などの寄贈・収集により、町の外観というハードな面だけでなく、芝居町の雰囲気というソフトな面を再現することが可能となった。その試みとして開催されたのが、「再現！道頓堀の芝居小屋」と「芝居町道頓堀の風景」である。

大阪市立住まいのミュージアム

「再現！道頓堀の芝居小屋」

大阪くらしの今昔館の愛称で知られる同館は、「住まいの歴史と文化」をテーマにした日本初の専門ミュージアムで、天保初年の町並みを実物大で復元した「大坂町三丁目」は、海外からの多くの見学者を魅了している。「再現！道頓堀の芝居小屋～道頓堀開削399年～」は、同

館の企画展として平成26年4月19日から5月25日まで開催され、センター収集資料のほか、関西大学図書館所蔵品など、120点余りを出品した。

『難波鑑』(延宝8年[1680])に始まる江戸時代の地誌類や絵画、中村儀右衛門資料の建築図面や舞台背景の下絵である大道具帳、今昔館所蔵の上方役者絵、歌舞伎や浄瑠璃の宣伝のために刷られた芝居番付、大正から昭和初期のムードを伝える図書館所蔵の松竹座ポスターや山田伸吉がデザインした『SHOCHIKUZA NEWS』、昭和・平成に戯曲作家として活躍した北條秀司ゆかりの品々によって、道頓堀400年のあゆみが時代を追って辿れるような構成とした。

展覧会の目玉は、会場中央に設らえた「幻の浪花座」の正面建絵図による立体造作と立体模型(1/30)である。儀右衛門資料には二種類の浪花座設計図が残る。一つは和風建築によるもの、他方は正面に円形ドームがのる洋風建築としてのものである。当時の写真からは和風案が採用されたことがわかるが、大阪から遠く離れた秋田県小坂町に、洋風案とそっくりで、ほぼ同時期に建てられた芝居小屋が現役で活躍している。小坂鉦山は、本山彦一が手腕を奮った児島湾干拓事業とともに大阪の藤田組の主力事業として、明治39年(1906)に日本一の生産量を誇る銅山となった。銅山で潤う町の厚生施設として明治43年に誕生したのが「康楽館」である。柿落しには大阪歌舞伎の尾上松鶴一座が興行するなど、大阪とゆかりが深い。その設計は小坂鉦山工作課長の山本辰之助によるが、藤田伝三郎が道頓堀に足繁く通っていたことから、儀右衛門の浪花座洋風案と康楽館との関係については興味深いものがある。実現しなかった洋風の浪花座案が計画以来およそ100年を経て、その正面だけではなく、今昔館に再現されたことになる。内部には立体模型が展示されるとともに、大道具帳のデジタル映像が上映され、芝居小屋の雰囲気を醸し出していた。



浪花座洋風案による立体造作



モダンな意匠がうかがえる山田伸吉コーナー

早稲田大学演劇博物館「芝居町道頓堀の風景」

早稲田大学演劇博物館は、関東大震災後に資料の散逸を怖れた坪内逍遙によって昭和3年(1928)に開設された。シェイクスピア時代のロンドン・フォーチュン座を模し、古今東西の演劇資料を展示する特色ある大学博物館である。

平成26年の秋季企画展として「寄らば斬るぞ！新国劇と剣劇の世界」が開催された。大正6年(1917)に澤田正二郎を中心に東京・新富座で旗揚げされた新国劇は、東京では振るわず、道頓堀の弁天座公演以降、人気を博するようになり「大阪で育った劇団」といわれる。そのため、企画展には道頓堀ゆかりの資料が数多く出陳されたほか、CG「道頓堀五座の風景」が上映された。道頓堀で育まれた文化が東京でどのように受け留められるのかという実験的な試みとして、関西大学と早稲田大学との連携協定にもとづいて開催されたのが、コラボ展「芝居町道頓堀の風景—大道具師 中村儀右衛門と芝居画家 山田伸吉—」である。今回は、二人をクローズアップし、彼らの作品から19点を出品し、平成26年12月18日から平成27年2月4日の会期で行われた。

1月23日の長谷洋一研究員(文学部教授)によるギャラリートークには、急遽開催が決まっ

たにもかかわらず、同館のSNSなどによる広報で、狭いスペースに多くの参加者が集まり、メモをとりながら熱心に解説に耳を傾け、終了後も多くの質問が寄せられるほどの盛況ぶりであった。企画展とあわせて、かつての道頓堀を初めて知ったという声が多く、大阪の文化遺産がもつ可能性を改めて認識することとなった。また、同館による発信力とこれまでの活動にもとづくネットワークづくりなど、これからの大学博物館のあり方を考える機会ともなった。



浪花座洋風模型と《道頓堀今昔》



ギャラリートーク

以上、「芝居町道頓堀の景観復元プロジェクト」に関わって開催された展覧会を紹介した。大阪都市遺産研究センターでは、5年間の活動期間中、調査・研究の成果を公開する手法として「展示」を用いることが多かった。当然のことながら、教育普及活動は博物館の機能として大きな位置を占める。センターは関西大学博物館内に設置されたため、その機能を兼ね備えることができた。大学の調査・研究の発信という点では、博物館などの展示施設との連携によって“実物”を展示するという手法は、バーチャルな時代にあって、今後さらに重要な役割を果たすのではないだろうか。

■ 博物館だより

◇平成26年度ミュージアム講座「なにわの文化遺産 (9)」は、3日間開講し、72名の方から聴講の申込みをいただきました。

11月7日「牧村史陽氏旧蔵写真で見る大阪の都市遺産」 大阪都市遺産研究センター特任研究員 内田吉哉

11月14日「『摂津名所図会』でめぐる大阪」 大阪都市遺産研究センターPD 中尾和昇

11月21日「資料からみる近世なにわ・大阪の食文化ー魚文化誕生の背景ー」

尾道市立大学経済情報学部講師 森本幾子

◇11月9日から14日まで博物館実習展を開催しました。今年度は46名の実習生が「アールヌーヴォーと日本」「神になった人間ー菅原道真ー」「大阪・堺・阪堺電車ー都市をつなぐ道ー」「一九六三 あ・映画」の4班に分かれ、博物館学課程の集大成として展示を構成しました。テーマは、大阪商業大学商業史博物館と共同でおこなった祭礼行事の調査と菅原道真の画業をふまえて実習生が選んだものです。また、小企画展「菅原道真とその門人・画友」も併催されました。会期中には527名のかたにご覧いただきました。



◇冬季企画展として「新収蔵資料展」を12月1日から1月17日まで開催しました。この企画展では、関西大学泊園記念会・大阪都市遺産研究センターが新たに収蔵した資料を展示しました。また、常設展示室では、本学が世界に誇るトップスケーター高橋大輔さんの特別展「勇氣と感動をありがとう！ 高橋大輔さん」展が同時に開催され、バンクーバーオリンピックの

銅メダル、2010年世界選手権大会のメダルとコスチューム6着ほかを展示し、この期間の来場者は、4,382名を数えました。



◇本年度下半期に本館へ寄贈いただいた資料を紹介します。吉丸満氏から日本刀（河内國平作）1点、元理事長（現顧問）羽間平安氏から寒山拾徳象牙製筆立ておよび筆15本、さらに、本学校友の遠山慶一氏から実地踏測大阪市街全図ほか4点の寄贈がありました。今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。

・ ・ ・ 編集後記 ・ ・ ・

表紙は、本館所蔵の伊万里錦手大皿（江戸時代）です。内面三つの巴形の窓それぞれに、雌雄の雉や白梅、牡丹、果実などが描かれ、あいだを赤と白の牡丹と金泥のパルメット風の草花や幾何学文で埋める染錦手（金欄手）の大皿です。元禄期以降の国内需要の高まりに合せて、細爛な色絵磁器が出現したものです。

関西大学創立130周年記念事業の一環として平成27年度 関西大学博物館企画展「かんさい・大学ミュージアムネットワーク連携展『大学の扉を開く』」が4月1日から5月17日まで開催されます。この連携展では、大阪府11館、兵庫県3館、奈良県1館、滋賀県1館の16の大学ミュージアムが集い、それぞれが所蔵する優品、名品が「いにしえ」「王朝文化」「文学」「大大阪」「まなび」「エンターテインメント」「文化的建築」といったキーワードを柱に「大学の扉を開く」というテーマを設けて展示されます。

平成24年4月に第5代博物館長として就任しました藪田 貫館長が3月末をもって定年のため退任いたします。在任中の関係各位のご支援ご厚情に感謝いたします。